

## 特別公開5 松壽堂 (しょうじゅどう)



### ①歴史・概要

奈良墨は、古くより奈良を代表する産業の一つでした。室町時代に興福寺の二諦坊で初めて油煙墨(ゆえんずみ)がつくられたといわれており、それが奈良墨のはじまりです。

もともと墨は、推古時代に高句麗の僧より伝えられました。墨をつくる職人墨師は社寺のお抱えでしたが、やがて商品として売られるようになったといわれています。

16世紀の終わりごろ、松井道珍が良質の油煙墨をつくり幕府に献上したことをきっかけに、奈良の製墨が盛んになったといわれており、18世紀のはじめには奈良の墨屋は38軒にもなったといえます。そのうち、朝廷や幕府に墨をおさめる御用墨師が3軒あったようですが、のちに松井道珍の子孫である松井和泉と森若狭の2軒となったようです。

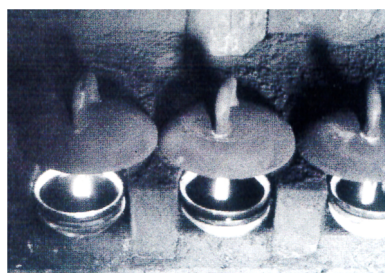
家伝では、その森若狭を始めとするのが松壽堂です。創業は江戸時代末と伝わりますが、古くは江戸時代初期には文献などでその名が記されていたといわれています。

代々伝来の秘法で墨色の濃淡を自在に作り出すと謳われた卓越した技術により、古くより宮内庁御用達として営まれてきました。時代に応じた製墨技術の進歩に応じて研究が重ねられ、今もこの地で製墨が行われています。

### ②見どころ

築300年と伝わる町家の大戸のくぐり戸を開けると、松壽堂で作られた墨が展示され、墨特有の香りが迎えてくれます。

さらに進むと町家ならではの吹き抜けの土間に、墨の製造工程を紹介する模型や展示が行われており、奈良墨の特徴である油煙墨と松煙墨(しょうえんずみ)の違い、奈良墨の製造工程などを解説いただけます。



油の煙からでる煤を集める様子

#### ここも見どころ!

奈良町の町家の扉は、古くは大戸といって、一枚の大きな扉を上塗り上げるか、奥へと跳ね上げる扉が一般的でした。重く開け閉めが大変なため、小さなくぐり戸が付くのが特徴です。

かつては、防犯の観点から、人が容易に出入りできないことが重要でしたが、時代とともに不便なことから扉を付け替えるようになります。中にはかつての大戸を活かして、開き戸にしたり、引戸にしたりと、さまざまな工夫が見られます。